

「ジョイスの‘Eveline’における ケルト的二重性と循環思想について」

樋口紀子

I. はじめに

ジョイスは *Dubliners* を「少年期」「青年期」「成熟期」「社会生活」と4つの段階に分けたが、¹⁾ この‘Eveline’は、分類としては“The Sisters”, “Encounters”, “Araby”という三つの作品で構成される「少年期」に続く、次の段階である「青年期」の最初の作品である。しかし、この作品が書かれたのは早く、制作順序としては“The Sisters”の次で、つまりこれは *Dubliners* の中で第二作目の作品に当り、1904年9月には *Irish Homestead* に発表されている。²⁾ Tindallはこの作品について、“One of the earliest of the stories, ‘Eveline’ may have set the theme and tone of the book. Many of the later stories seem elaborate variations upon it or its extension.”³⁾ と述べているように、この‘Eveline’は、*Dubliners* の15篇の作品の中でも一番短い作品ながら、その構成やテーマの取り扱い方において他の作品の基本となる作品として認識されているのである。ゆえに、ジョイスが *Dubliners* において意図したことが全て含まれている作品であると言えるのではないであろうか。

また、*Dubliners* の15篇の作品の中で、この‘Eveline’のように、主人公自身の名前が作品につけられているのはこれだけで、しかもその名前が聖書に記述されている人類最初の女性「エバ(Eve)」を連想させるものであるということからも‘Eveline’という作品は、大変意味深い作品であるということが言える。つまり、ジョイスは、人類最初の女性であり、しかも人類の母親とされる女性の名前をかりて、この作品の中でアイルランド

の女性の代表、そしてさらにはアイルランドという国そのものを描こうとしたのではないかということである。しかも、ジョイスはこの作品が発表された直後、1904年10月にノーラと共にアイルランドを後にし、'self-exile' としてヨーロッパに渡っている。従ってこの作品を書いている間にアイルランド脱出計画を着々と進めていたわけであるから、この作品において主人公イーヴリンに、ジョイス自身の思いというものがあると思われる。そのような意味においてもこの 'Eveline' は、*Dubliners* の中で重要な位置を占めている作品であるということが言えるのではないだろうか。

II. イーヴリンのおかれた状況

この物語は夕暮れ時に、主人公イーヴリンが窓のそばで外をながめながら、物思いにふけるところから始まる。その日はフランクというブエノス・アイレスに住んでいる船員と駆け落ちを執行する日であった。イーヴリンはいざダブリンを離れるとなると、郷愁がわいてきて、いろいろなことが頭の中を去来するのである。近所の子どもたちと一緒に楽しく遊んだ幼い日々、慣れ親しんだ家の様子、今まで働いてきたお店のこと、母親がわりとしてやってきた家での仕事、母親の最後の様子等である。実は、イーヴリンに家族の誰にも黙って家を出ることを決心させたのは、母親の最後の様子であった。彼女の母親は、酒好きな夫につくし、子どもの世話をし、家のきりもりをした典型的なアイルランド女性であった。ただ一つ違ったことは、錯乱の中で人生の最後を迎えたということである。母親の一生は、「ありきたりの犠牲をつみ重ねたあげく、錯乱のなかで終わった一生 (life of commonplace sacrifices closing in final craziness/D 41)」⁴⁾ であったとイーヴリンは述べている。作者ジョイスも、ノーラに宛てた手紙 (1904年8月29日) の中で、母の生きざまをアイルランドの「母」、あるいは「女」なるものの典型と考えている。「母は父の虐待と長年の苦勞と、…によってゆっくりと殺されたと思います。…僕にはそれが犠牲者の顔だとわかりました。僕は母を犠牲者とした体制を呪いました。」⁵⁾ ジョイスは母

親を犠牲者と考えていたのである。そしてイーヴリンの母親も同じような犠牲者としてこの作品の中では描いている。

ひたすら家族につくしたイーヴリンの母親が錯乱状態に陥り、亡くなったというのは、家庭の中で密接に母親に接している若い娘にとっては大変衝撃的なことであっただろう。母の死後、イーヴリンは「できるだけ家にいて、家事のいっさいをみる (her promise to keep the home together as long as she could./D 41)」という、生前の母親との約束を忠実に守り、ずっと家族の中で母親の役割をこなしてきた。しかし、このような平凡な日常生活の中に突然フランクという男性が現れ、恋をし、ダブリンを「脱出」して彼と一緒にブエノス・アイレスに行くことを約束してしまう。彼は「やさしく (kind), 男らしく (manly), 率直な人 (open-hearted) (D 39)」で、内気なイーヴリンの心を溶きほぐし、すぐに親しくなる。フランクはイーヴリンが行ったことのない国や見たことのない船や航路のことを話したり、イーヴリンを歌劇 *"Bohemian Girl"* に連れて行ったりした。しかも、彼は劇場では彼女のために今まで座ったことのないような上席を用意し、イーヴリンの優越感をくすぐるのである。

このフランクと一緒に「新しい生活 (another life/D 39)」を始めようとしている「ブエノス・アイレス」は、Jacksonによれば、*"The spelling is now standardized as 'Aires,' and the name means 'Good Air(s)' in contrast to the stifling atmosphere of Dublin (which means 'Black Pool')"*⁶⁾ であるという。つまり、「麻痺 (paralysis)」で澱んでいるダブリンとは正反対の場所である。ゆえにその只中にいる19歳のイーヴリンが、きれいな澄みきった空気に満たされていると想像しているブエノス・アイレスに対して憧れを持つのも当然であろう。

また、結婚をするということもイーヴリンにとっては意味のあることであった。当時のアイルランドは、1845年に起った大飢饉や長く続いていたイギリス支配の影響で、外国に移民する人の数が多く、経済的に大変貧しい国であった。このような状況の中で、アイルランドでは結婚率も出生率も低く、従って多くの未婚の男性、女性がいたのである。⁷⁾ この *Dubliners*

にもそのような未婚の人々が多く描かれている。“The Sisters”のFlynn姉妹，“Clay”のMaria，“A Painful Case”のDuffy，“The Dead”のMorkan姉妹，その姪のMary Janeもそうである。特に当時は女性の職業が限られていたため，女性が未婚のまま生きていくということは大変であった。Mariaは，若い時は他人の子どもの子守をし，その子どもが大きくなってからは，売春婦達の厚生施設で住み込みの下働きとして働き，何とか生計をたてていたし，Morkan姉妹や姪のMary Jane達は裕福な家庭の子女達にピアノを教えることによって生活をしていたが，彼女達の生活は大変質素であったと推測できる。ゆえに女性にとって単に「結婚をする」ということでも大変意義深いことであった。当時のアイルランドの状況を考えると，結婚というのは選ばれた人だけがする特権であったと言っても過言ではないと思う。従って，19歳の若いイーヴリンがフランクと結婚をして，おとぎ話に出てくるような新天地で生活をするということに魅力を感じるのには仕方のないことなのである。しかし，ここで大切なことは，客観的に考えて，これが本当に彼女にとって明るい未来につながるのかということだ。

というのは，アイルランドは現在でも厳格なカトリック教国だからである。フランクは今ではブエノス・アイレスに住む「移民(Exile)」であるが，母国はアイルランドで，ダブリンには休暇で帰って来ている。つまり，彼もアイルランドの慣習や社会についてよく知っていると思われるが，しかし，彼はイーヴリンと結婚を決意したにも拘らず，イーヴリンの父親を説得するでもなく，ダブリンのカトリック教会できちんと結婚式を挙げるでもなく，彼女を「駆け落ち」という手段で奪っていかようとしているのである。アイルランドで生まれ，そこで育った者であれば，教会を無視した結婚というものがどのように取り扱われるかということとはよく知っているはずである。つまり，これは教会に対する反抗であるため，彼らの結婚は正式な結婚とは認められないし，正式な結婚をしないままアイルランドを出て行くということは，カトリック教会が支配しているアイルランド社会に対する完全なる決別を意味することで，ゆえに一般市民にとって

はゆゆしきことであった。

加えて、イーヴリンがフランクと船でダブリンを出ようとしていた港は“North Wall” (D 42)であるが、当時ここから直接ブエノス・アイレスに向かう船はなく、途中イギリスのリヴァプールに寄ってそこから出たという事実である。⁸⁾ Kenner 他の批評家達は、結婚というのはイギリスまで連れ出す口実で、フランクはそこでイーヴリンを置き去りにするのではないかとフランクのイーヴリンとの約束に対して疑問をなげかけている。⁹⁾¹⁰⁾¹¹⁾¹²⁾ また、イーヴリンがフランクとつき合っていることが父親にわかった時、父は「わしはこういった船乗りの手合いを知っている (I know these sailor chips./D 40)」と言い、イーヴリンがフランクとつき合うことに反対しているが、この父親の言葉を借りるならば、船乗りが娘をだますということが一般的にあったということがこの言葉によってわかるのである。さらに Jackson は“to go to Buenos Aires' used to mean to become a prostitute, particularly through a pimp”¹³⁾ と述べているが、以上のことから、この「駆け落ち」が将来にかなりの危険をはらんでいるものであると考えられる。

但し、イーヴリン自身もその危険性を十分承知していたのかもしれない。彼女は「フランクが救ってくれるわ。彼は人生を、たぶん愛も与えてくれるだろう (Frank would save her. He would give her life, perhaps love, too./D 41)」と考えているが、「たぶん愛も与えてくれるだろう (傍点筆者。以下同様。)」というのは、恋人と駆け落ちを決心した娘の言葉としては頼りないものであると言える。さらに「彼女はこれからフランクと一緒に新しい生活の探険に向かうのだ。(She was about to explore another life with Frank./D 39)」とも言っているが、“explore”ということは、フランクと一緒に行くことが「探険」をするように危険なものであるということを直感的に感じているということではないであろうか。

実は、この「駆け落ち」ということを考えると、ジョイス自身がノーラと同じような形の結婚をしたことは有名である。但し、ジョイスの場合はアイルランドの厳格なカトリック教会が「芸術」に対して行なっている厳

しい制限にうんざりし、アイルランドを出たのである。というのは、芸術家として生きようと決心していたジョイスにとって、当時のアイルランドは彼が真の芸術家として生きることのできる場所ではなかったのである。そこで、ジョイスは芸術家のみならず、人々の生活にまで制限を加えているカトリック教会と決別する決心をし、違った人生を歩むためにアイルランドを「脱出」し、ヨーロッパで新しい生活を始めることになるのであるが、この経緯と決心を手紙（1904年8月29日付）でノーラに書き送っている。

Six years ago I left the Catholic Church, hating it most fervently. I found it impossible for me to remain in it on account of their pulses of my nature. I made secret war upon it when I was a student and declined to accept the positions it offered me. By doing this I made myself a beggar but I retained my pride. Now I make open war upon it by what I write and say and do.¹⁴⁾

つまり、ジョイスの「脱出」は、真の芸術家として生きるためだったのである。

一方、イーヴリンの「脱出」の理由は、「母親のようになりたくない」ということであった。つまり、夫や家庭や教会に誠心誠意尽くしたにも拘らず、錯乱の中で最後を迎えた母親と同じ運命をたどりたくないということだったのである。彼女にとって母親の存在は、死んだ今も彼女の全てを縛る鎖であった。イーヴリンはフランクのことをその鎖をほどき、自分に自由を与えてくれ、自分が欲している幸せというものを全て与えてくれる「救い主」のように思っていたのである。つまり、イーヴリンのブエノス・アイレスへの「脱出」は、ジョイスが芸術家として信じるころの自分の人生を完成させるためというような「積極的な脱出」ではなく、他人が素晴らしい人生を与えてくれるのではないかというような受身的な「消極的な脱出」であった。要するに、これは単なる現実からの「逃避」であ

る。しかもこの「消極的な脱出」は、「もしフランクが将来においても、過去の一時期のようにイーヴリンに対してやさしく、誠実であれば」というような相手まかせの条件をとまなうものであった。そして、さらに、ジョイスとイーヴリンの行動において決定的に異なる点は、ジョイスが実際にアイルランドを「脱出」したことに對し、イーヴリンは「脱出」する決心をしながら、ぎりぎりのところでその計画を断念したという点である。つまり、自分で切り開こうとする「積極的脱出」と他人まかせによる「消極的脱出」の差がここに出ているのではないかと思われる。

III. ケルトとキリスト教的二重性

ジョイスはどの作品においても、登場人物の名前をつける場合に大変注意深く、何からの意図をもって名付けたが、前述のように、主人公の名前が作品名になっているのは *Dubliners* 15篇の作品中、この作品だけであるので、“Eveline”という名前には他の作品以上に特別な意味があるものと思われる。

この“Eveline”という名前は、聖書において人類最初の女性であり、全ての女性の根源である「エバ(Eve)」を表していることは多くの批評家の主張するところであるが、¹⁵⁾¹⁶⁾“Eve”や“Eva”というのは一般的にアイルランドで好まれた名前でもあるらしい。¹⁷⁾ 旧約聖書の「創世記」によれば、神は最初の人間である「アダム(Adam)」を造った後、そのアダムの助け手として女性を創造したが(創世記2:18~24)、この最初の女性が「エバ(Eve)」である。二人は「エデンの園」で何不自由のない生活をしていて、その後エバは、狡猾なへびにそそのかされ、神から食べてはいけないと言われた「善悪を知る木(創世記2:9)」の実を取って食べ、アダムにも食べるように奨めたことでも知られている。この神の命令に背いた行為により、二人はエデンの園を追放され、その報いとしてアダムは「一生苦しんで地から食物を取る(創世記3:17)」者とされ、エバは「苦しんで子を産む(創世記3:16)」者と定められた。この一連の話からキリスト教界では、最初に女性が神の意志に背く、「不従順」という「罪

(原罪)」を犯し、その女性によって男性までもが同じ罪を犯すようになったとされ、歴史の中で女性は最初に罪を犯した者として、長い間冷遇されてきたのは周知の事実である。

聖書によれば「エデンの園」を追放される時にアダムが妻を「エバ(Eve)」と名づけたとされている(創世記3:20)。このエバという名前は、ペブル語で「命ある」という意味で、¹⁸⁾¹⁹⁾彼女から生まれた子供の子孫が地に満ちることになるので、このエバという名前は「全て生きたものの母」(創世記3:20)を表わす言葉でもあるのである。つまり、この「エバ」から派生するイーヴリンは全ての女性の代表、母の代表と考えられる。

また、「エバ(Eve)」はアイルランドではゲール語の「アイフェ、イーフェ(Aoiffe)」という名前と対応する名前でもある。²⁰⁾ケルト神話においては「アイフェ」という名前の女性は三人いる。²¹⁾一人は“the Land of Shadows”の王女で、ク・フーリンをわなにかけようとしたが、恋におち、彼の子を産む女性である。後にク・フーリンは、その息子と戦うことになり、自分の息子と知らずに殺してしまうことになる。

二人目は「海の神」リール王の2番目の妻で、彼女にとっては実の姉でもあった亡き前妻の子どもたちに嫉妬をし、のろいをかけて白鳥にかけてしまう。その白鳥たちはのろいのゆえに、3つの異なった場所でそれぞれ300年を過ごさなければならない運命を課されるのであるが、アイフェの行為に気付いた彼女の父が今度は彼女にのろいをかけ、この世から消してしまうのである。

三人目はマナナン・マックリールの息子の恋人で、その恋人は白鳥にされ、殺されてしまう。そして、その皮でバッグが作られるのであるが、それが「フィアンナの宝のバッグ」として有名になるという話である。

さらに、「アイフェ、イーフェ(Aoiffe)」というのは、歴史的にはアイルランドがイギリスの支配を受けるきっかけを作ったレンスターの王の娘の名前でもある。レンスター王ダーモット・マックローはアイルランドでの戦いに破れ、イギリスに逃れることとなったが、レンスターを奪還する

ために、当時のイギリス王であるヘンリー2世に臣下の誓いをたて、その見返りとして援助を求めるのである。結果、ウェールズの優れた武将であったストロングボウ伯爵、リチャード・フィッツギルバート・ド・クレア、通称「ストロングボウ（強弓）」将軍に自分の娘と結婚させることと、後に王位継承権を与えることを条件に、援軍を頼み、その結果マックローは再度アイルランドを手中におさめることができたといういきさつがある。ストロングボウ将軍は約束通り、マックローの娘イーフェと結婚をし、そして、マックロー亡き後はアイルランドの王位継承者となるが、その後、兵を率いてアイルランドに上陸したヘンリー2世にアイルランド全土を献上するのである。ここにイギリスのアイルランド支配が始まる。1171年のことであった。さらに、1175年にはヘンリー2世のアイルランドに対する宗主権を確認した条約、「ウィンザー条約」が結ばれる。

つまり、アイルランドはその後800年の間イギリスの植民地となるのであるが、イーフェはアイルランドが植民地化されるきっかけになった女性であり、父親の権力維持のために外国人と政略結婚をさせられた女性なのである。不従順という罪により樂園を追放された「エバ」は夫に従属する者となり、父の欲望によって売られた「イーフェ」がイギリス人に従属する者となったというのは、皮肉な共通点ではないであろうか。

従って、「イーヴリン」という名前にはこのようなキリスト教的意味合いと、ケルト的、アイルランド的意味合いという二重の意味が込められていると思われる。ゆえに、イーヴリンというのは、キリスト教的なものと同ケルト的なもの両方に影響されてきた、そして今も影響され続けているアイルランド女性の代表でもあるし、その両方を融合しているアイルランドという国そのものの象徴でもあると言えるのではないであろうか。

実は、ジョイス自身もアイルランドのことを *Ulysses* では、「さまよひ歩く老婆。不滅なる存在が卑しい姿に身をやつして、おのれの征服者とやくぎな裏切り者とに使えている。どちらからもなぶられている娼婦 (A wandering crone, lowly form of an immortal serving her conqueror and her gay betrayer, their common cuckquean, … a messenger from

the secret morning.)」²²⁾「自分は二人の主人、すなわちイギリス人（大英帝国）とイタリア人（ローマ・カトリック）に仕える身だ(I am a servant of two masters, …an English and an Italian.)」²³⁾と述べているし、また、*A Portrait of the Artist as a Young Man*. ではアイルランドの教会のことを「キリスト教世界のはしためである教会(a church which was the scullerymaid of christendom)」²⁴⁾とも述べている。つまり、アイルランドは長い間、政治的にはイギリスに、宗教的にはローマ・カトリックに支配されるようになり、イーフェが王女からストロングボウ将軍に隷属するはしために転落したように、アイルランド自身も女神ダヌの国から、はしためや娼婦に転落した国そのものなのである。また、*A Portrait* でステイーヴン・ディーダラスが、アイルランドを「仔豚を食べる雌豚」にたとえているように、「『愛蘭は母であり女である』というイメージはジョイスやオブライエンなど愛蘭作家が共通に描くもので、それはケルト民族が受け継いできた大地母神信仰に根ざす精神的遺産によるものであり、こうした風土と母(女)というものに共通した性格は、ともに生命の源でありながらその生命の自由な飛翔をはばむところにある」と言われている。²⁵⁾

IV. イーヴリンとケルト的循環思想

この作品に象徴的なものとして扱われているものに「ちり・埃(dust)」がある。この作品の中に名詞の「ちり・埃(dust)」は2回、動詞の「埃をはらう(dust)」は1回、形容詞「埃っぽい(dusty)」は2回使用されている。要するに合計5回この「ちり」に関する記述があるわけであるが、この作品では「ちり・埃(dust)」は、イーヴリンが「いったいぜんたいこの埃はどこから来るのかといふかりながら、ずいぶん長い年月の間一週間に一度ずつ埃をはらってきた(…she had dusted once a week for so many years, so wondering where on earth all the dust came from/D 37-38)」ものである。これに対してLeonardは、“Dust may appear insignificant, but it is also impossible, without extraordinary effort, to stop it entirely or control it completely.”²⁶⁾と述べている。はらっても

はらっても、またいつしかたまっていく埃は、過去から現在において常に循環しているものである。そしてその「埃をはらう」という動作はイーヴリンや彼女の母親だけでなく、アイルランドの女性たちが何世紀にも亘って繰り返してきた仕事でもある。ここにも過去と関連のある循環思想が現れているのではないだろうか。

“dust”はまた聖書でいうと、「人」を表すものでもある。「主なる神は土のちりで人を造り、命の息をその鼻に吹きかけられた。(創世記2：7)」つまり人を構成しているものが“dust”である。そして、人は神の意志に背くという罪を犯し、エデンの園から追放された時から、生命が終わる時には“dust”になるように運命づけられた。「あなたは顔に汗してパンを食べ、ついに土に帰る、あなたは土から取られたのだから。あなたは、ちりだから、ちりに帰る。(創世記3：19)」という言葉により、“dust”は人間の死後の姿そのものでもある。また、人は「ちり」から造られ、その「ちり」に帰るわけであるから、これはまさしくケルトの「循環思想」にもつながるものであると言える。さらに、ケルトの末裔たちはあの世に生きる過去の人、つまり「死者(the dead)」にいつも影響されながらこの世で生きているのであるから、彼らはそのような目に見えない死人だけではなく、“dust”という目に見える形を取った過去や死を意味するものに覆われ、常に影響を受けているとも言えるのではないだろうか。彼らは意識すると、意識しないとに拘らず、この世とあの世を行き来する“dust”の循環の中に既に組み込まれているのかもれない。少なくともイーヴリンはその“dust”が何ものなのか、どこから来るのかはわからなかったが、その存在は知っていたのである。そしていつもその“dust”と密接に関わっていた。ゆえに、イーヴリンをアイルランドの家庭に縛りつけていたものは、実は「母親との約束」ではなく、本当はこの“dust”という過去とのつながり、さらには「死者」の存在そのものなのかも知れない。

フランクと共にアイルランドを出て行こうか、それとも留まろうかと思いつくイーヴリンに「脱出」を決心させたのは、“Derevaun Seraun!(D

41)”という全く意味がわからない、亡き母の狂気に満ちた叫び声であった。この意味について Tindall は“The end of pleasure is pain.”²⁷⁾ という意味のゲール語であるとし、Brandabur は、“the end of song is raving madness”²⁸⁾ の意味であるとしているが、どちらの意味を取るにしても、フランクと「脱出」した場合のイーヴリンの将来を言い当てたような内容は、ある意味で彼女の母親の彼女への貴重な遺言であったとも言える。しかし、まだ若いイーヴリンにはその意味が十分理解ができず、むしろ臨終の母の狂気の姿に恐怖を覚え、それが「脱出」の原動力となったわけであるが、いざ港に行っても彼女は錯乱状態である。フランクの話に答えることもできず、頬は青ざめ、まるで「死者(the dead)」のようであった。ここで彼女は初めて神に祈るのである。その時、船の汽笛が鳴る。「船は長い、悲しい汽笛を霧のなかに吹き鳴らした。(The boat blew a long mournful whistle into the mist./D 42)」ここで使用されている“mournful”という単語は、死者を悼む場合に使う言葉である。つまり、“mournful whistle”とは「死を予告するような汽笛(警笛)」である。そして、その余韻をひきつぐような「鐘(警鐘)が彼女の胸に鳴りひびいた。(A bell clanged upon her heart./D 42)」そして、この死者からの警鐘の音によってイーヴリンは我に返り、ダブリン「脱出」を思いどどまる。これが彼女の初めての人生の決断である。さらに、彼女はここで初めて自己を見いだす。アイルランド人としての「アイデンティティ」の発見である。

この最後の場面で最終的な決断を迫られた時、イーヴリンは「なすべき義務をお示し下さい」と神に祈るが、これはイーヴリンの能動的な行動であると言える。今までただフランクが「幸せ」を運んでくれると、全て受身的に将来を夢みていたイーヴリンの姿からすれば、大変な違いである。そして、興味深いことは、神に祈った祈りに対して神が応えるのではなく、死者からのメッセージであるかのような“mournful whistle”が彼女に答えることである。この死者が応えるということもケルト的二重性を示すものではないであろうか。

イーヴリンは、たとえ、母親のようになろうとも、未婚のまま“Clay”のMariaのような晩年を送ろうとも、ダブリンで“dust”を見つめながら、その“dust”の中で生きるという決心するのである。これは時がくればイーヴリンもいつかケルトの先祖達と同じ“dust”になるということの意味する。つまり大地にかえり“dust”となり、また天に舞い上がり、人々の上に降り注ぐ存在となるのである。そして、この循環は永遠に続く。これこそまさしくケルト特有の「循環思想」そのものではないであろうか。おそらくイーヴリンはこの時初めてダブリンの“dust”が何なのか、“dust”がどこから来るのか認識したと思われる。

V. おわりに

波止場での最後の場面で、イーヴリンを「精神的麻痺」に陥った鉄柵の中にいる動物にたとえ、その否定的側面を中心に解釈している批評家が多いが、果たしてこれを何も決断できない「精神的麻痺」の状態というだけで片づけてよいものであろうかと思う。というのは、少なくともジョイスはこの最後の場面で、フランクを「栄光の未来を約束する救い主」としては描いていないからである。それよりもむしろ、ジョイスは彼を、イーヴリンを「海にひきずりこみ、溺れさせようとしている」者として描いている。そしてイーヴリンは、「脱出」の土壇場でそのようなフランクの真の姿とその背後にある海の存在に気付き、「苦悩の叫び(a cry of anguish)」をあげるのである。彼はまさしくイーヴリンに「生」を与える救い主ではなく、「死」を与える海からの使いであることに気づく瞬間である。North Wallからフランクと行くところは、イーヴリンにとって輝く未来ではなく、暗黒の死の世界であったのである。²⁹⁾ これを悟ったイーヴリンはというと、「蒼白の顔(white face)」をしている。まさにこれは死人に出会った時の驚愕の顔色ではないであろうか。そして、魂も救いも何もない異国の「死人」に対して「愛のしるしも、別れのしるしも、彼を認めるしるし(no sign of love of farewell or recognition)」も示さないのは当然のことであると思われる。米本氏は、イーヴリンは「海を渡って異国へ

行き新しい生活を実際に試みようという好機と、それを拒否する機会とをあたえられた唯一の人物である」³⁰⁾と述べているが、これはつまりこの最後の場面で、イーヴリン自身がアイルランドに留まることを積極的に選択したということの意味している。そして、興味深いことにイーヴリンはそれを「ケルティック・トワイライト (Celtic Twilight)」の中で決心したのである。これはケルト暦でいうところの一日の始まりに当るので、彼女のケルトの末裔としての人生の始まりを象徴しているのではないであろうか。しかも、この夕暮れ時は聖書の世界における一日の始まりでもある。ゆえに、ここにもケルト世界とキリスト教世界とを融合しているアイルランド的二重性を見ることができるのである。

イーヴリンにとってそれは「繰り返す歴史の中で生きる」という決断でもあった。この「歴史の繰り返し」は、どの民族においても当然ありうるものであるが、しかし、アイルランド人は、その「歴史の繰り返し」に特に固執した民である。なぜなら彼らは、他の国以上に「西の世界 (another world)」に思いを馳せ、「死者 (the dead)」に影響されながら、あたかも死者と同じ時を共有しているかのように生きてきたからである。つまり、これは過去に影響され、過去に強く支配されていることをも意味する。このアイルランドの過去や苦悩の歴史、長い間守り続けてきた慣習が、アイルランドに住み続ける典型的なアイルランド人全てにとっての「檻」でもあるし、ある意味においては、アイルランド人を外界から守る「砦」でもあるのである。そしてそれらを土台とし、常に過去を見つめながら生きるということは、発展性のない生き方というわけではなく、むしろ、アイルランド人をアイルランド人たらしめる生き方なのである。

イーヴリンがフランクとの駆け落ちを決心した時、彼女を思い留まらせたのは、彼女の家庭であり、彼女の少女時代 (過去) の思い出であり、母との約束であり、死を悼むような船の霧笛や鐘の音であった。イーヴリンは人が幸せを運んでくれる、人が幸せを作ってくれるという他人まかせの受動的な人生の築き方ではなく、過去を土台とし、過去に支配されながらも、永遠を基本とするアイルランド人として、そのアイルランドの歴史の

環の中に入り、自国の歴史を作っていくという積極的な決断をここでしたのである。これが他の場所に幸せを求めずに、自分の中に幸せを見つけるというアイルランド的な生き方の典型ではないであろうか。

このように、*Dubliners*の初期の作品“Eveline”においても過去や死の世界への認識、及び回帰、ケルト的循環思想の受容と参加、さらにはこれらによるアイルランド人としてのアイデンティティの回復というテーマが明確に描かれているが、*Dubliners*の最後の作品“The Dead”においてもこれは同様である。というのは、主人公 Gabriel は、アイルランド人でありながら、常に東（イギリスやヨーロッパ）に眼を向けている“West Briton”（アイルランド人でありながら、イギリスにかぶれている人のことを揶揄した言葉）であったが、Lily, Ivors 嬢、妻の Gretta という三人の女性により、それまで嫌っていたアイルランド的なものに対する素晴らしさを認識し、ケルト的西の世界「異界、または彼岸(the Otherworld)」を受け入れる。それは「エピファニーの日」（1月6日）の夜に、アイルランド全土に降る“snow”に影響されたものであった。この“snow”は最後の時の到来のように、静かにすべての「生者(the living)」と「死者(the dead)」の上に、同じように降り注ぐ。雪というものは、後に蒸気となって天にのぼり、時期がくれば、また地上に降り注ぐというケルト的循環思想の象徴そのものである。つまり、“snow”は、“Eveline”の“dust”と同じ、「あの世(another world)」と「この世(this world)」を行き来し、人々に影響を与えるものであると言える。この“snow”によって「彼(Gabriel)の魂は、死せる人々のおびたしい群れが住む、あの世界に近づき(His soul had approached that region where dwell the vast hosts of the dead /D 255)」, ついには「西の旅に出かける時がきた。(The time had come for him to set out on his journey westward/D 255)」と、Gabrielに初めてケルト的西の世界を受け入れさせるのである。これが Gabriel がアイルランド人としてのアイデンティティを確立した瞬間であると思われるが、このように、この“Eveline”という *Dubliners*の初期の作品におけるテーマが、確実に最後の作品である“The Dead”にも生

かされ、一つのサイクルを作っている。これが“Eveline”が *Dubliners* の基本となる作品と言われる所以である。

従って、主人公イーヴリンは、*Dubliners* 中の登場人物の代表であるとも言える。これがジョイスがわざわざ「人類の母」、または「アイルランドの母なる大地」を現わす「エバ(Eve)」を象徴する名前を主人公につけた理由ではないであろうか。つまり、イーヴリンは全てのアイルランド人の代表として描かれているのである。彼女は、アイルランドを脱出することができたにも拘らず、アイルランドに留まった。この後もイーヴリンは、Miss Gavanから小言を言われながらお店で売り子として働き、家庭では父親や幼い子ども達のためにかいがいしくつくし、そしてそのうち彼女は母親のように結婚するかもしれないし、Mariaのように未婚のまま一生を終るかもしれない。しかし、どのような人生を送るにしても、アイルランド人としてアイルランドに定住することを決心したイーヴリンの人生は、円環をともなったケルト十字架が象徴するように、全てが過去につながるものとなり、過去を繰り返すものとなるのである。まさに、アイルランドの歴史のように。そして彼女の先祖のケルト人達がそうであったように、イーヴリンも循環する歴史の一つとなり、彼女自身が“dust”となって「この世(this world)」と「あの世(another world)」を循環しながら、人々の上に降り注ぎ、人々に影響を与える存在となるのである。

《注》

- 1) Ellmann, Richard, Ed. *Selected Letters*. New York: Viking Press. 1975. pp.77-78.
- 2) Gifford, Don. *Joyce Annotated: Notes for Dubliners and A Portrait of the Artist as a Young Man*. Berkeley: University of California Press. 1982. p.48.
- 3) Tindall, William York. *A Reader's Guide to James Joyce*. New York: The Noonday Press, Inc. 1959. p. 21.
- 4) Joyce, James. *Dubliners*. Everyman's Library. 1991. p.41.
- 5) Ellmann, *Selected Letters*. New York: Viking Press. 1975. pp.77-78.
- 6) Jackson, John Wyse. *James Joyce's Dubliners: An Annotated Edition*.

-
- London: Sinclair-Stevenson. 1993. p.31.
- 7) Innes, C. L. *Woman and Nation in Irish Literature and Society, 1880-1935*. New York: Harvester Wheatsheaf. 1993. p.69.
 - 8) Jackson, John Wyse. *James Joyce's Dubliners: An Annotated Edition*. London: Sinclair-Stevenson. 1993.p.32.
 - 9) Kenner, Hugh. *Joyce's Voice*. London: Faber & Faber. 1978. p.81.
 - 10) Beck, Warren. *Joyce's Dubliners: Substance, Vision, and Art*. Durham N.C.: Duke University Press. 1969. p.115.
 - 11) Gifford, Don. *Joyce Annotated: Notes for Dubliners and A Portrait of the Artist as a Young Man*. Berkeley: University of California Press. 1982. p.50.
 - 12) Hodgart, M. *James Joyce: A Student's Guide*. London: Routledge and Kegan Paul. 1978. p.46.
 - 13) Jackson, John Wyse. *James Joyce's Dubliners: An Annotated Edition*. London: Sinclair-Stevenson. 1993. p.31.
 - 14) Ellmann, *Selected Letters*. New York: Viking Press. 1975. pp.77-78.
 - 15) Stein, William Bysshe. "The Effects of Eden in Joyce's 'Eveline.'" *Renascence* XV, Spring, 1963. p.124.
 - 16) Torchiana, Donald T. "Joyce's 'Eveline'--and the Blessed Margaret Mary Alacoque." *JJQ(James Joyce Quarterly)*. Vol. 6, No. 1, 1968. p.22.
 - 17) Torchiana, Donald T. "Joyce's 'Eveline'--and the Blessed Margaret Mary Alacoque." *JJQ(James Joyce Quarterly)*. Vol. 6, No. 1, 1968 p.22.
 - 18) *The Interpreter's Dictionary of the Bible*. New York: Abingdon Press. vol. 4. 1962. p.181.
 - 19) レオンハルト・ロスト著, 荒井献訳・編, 「旧約・新約聖書大事典」, 教文館, 1989年, p.199.
 - 20) Withycombe, E.G., Compiled. *The Oxford Dictionary of English Christian Names*. Oxford. 1953. p.107.
 - 21) Ellis, Peter Berresford. *A Dictionary of Irish Mythology*. Oxford University Press. 1987. pp.32-33.
 - 22) Joyce, James. *Ulysses*. New York: A Division of Random House. 1986. p.12.
 - 23) Ibid. p.17.
 - 24) Joyce, James. *A Portrait of the Artist as a Young Man*. London: A Triad Grafton Book. p.199.
 - 25) 吉津成久著, "エグザイルとしての二十代" 佐藤泰正編, 「文学における二十代」 笠間書院, 1990年, pp.31-32.

- 26) Leonard, Garry M. "Wondering Where All the Dust Comes From: Jouissance in 'Eveline'", *JJQ*(*James Joyce Quarterly*), Vol. 29, No. 1, 1991. p.23.
- 27) Tindall, William York. *A Reader's Guide to James Joyce*. New York: The Noonday Press, Inc. 1959. p.22.
- 28) Brandabur, Edward. *A Scrupulous Meanness: A Study of Joyce's Early Work*. Urbana: University of Illinois Press. 1971. p.62.
- 29) Leonard, Garry M. "Wondering Where All the Dust Comes From: Jouissance in 'Eveline'", *JJQ*(*James Joyce Quarterly*), Vol. 29, No. 1, 1991. p.35.
- 30) 米本義孝著, 「ジェイムズ・ジョイスの『イーヴリン』」, 「信州大学教養部紀要」 22号, 1988年, p.38。